



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 30 20 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

俳諧新十家類題集夏部

目錄

四月	立夏	青蘆	白重	更衣	裕	灌佛		
花御堂	安居	短夜	夏夜	<small>二丁</small>	杜宇	<small>三丁</small>	布穀	
老鶯	水鷁	<small>七丁</small>	牡丹	杜若	<small>八丁</small>	罂粟花	<small>九丁</small>	繁
陽花	葵	百合	苔枕花	<small>十丁</small>	酸漿花	茨花		
敷椿	印花	善楓	葉櫻	善景	<small>十一丁</small>	夏木立		
木丁園	茂	常盤木落葉	<small>十二丁</small>	桺花	山梔子花			
合歡花	櫻花	榜花	南天花	抽花	靈橘			
麦秋	<small>十三丁</small>	古茶	斂	初鰹	蚊	蚊燧火	<small>十四丁</small>	蚊



帳 蝸牛 蝙蝠 蛋 蚯 羽蟻 十五丁
五月 端午 糯日 粽 烏蒲叟 烏蒲賣 烏
蒲蒿 十六丁 竹醉日 筷 善竹 花菖蒲 十七丁 萍
藻花 田植 早少女 早苗 十八丁 覆盆子 荔
蓼 紫蘂 舶子 菴薹 夏草 夏野 夏山
五月雨 十九丁 夏月 二十丁 蛭 廿二丁 鴻淳巢 鴉飼 廿三丁
鱗 火串 照射 庶子 廿四丁
六月 嘉祥 廿五丁 青嵐 風薰 凉 廿五丁 暑 白雨
廿六丁 雲峯 廿七丁 清水 眼井 虫干 惟子 夏瘦
抱甕 廿八丁 扇 團扇 烏水 水飯 青田 蓮

畫顏 廿九丁 夕顏 瞿麦 石竹 麻 紅花 卅一丁 綿
花 瓜 瓜花 青薄 蟬 卅二丁 緣雲雀 青鶯
施采 御被 夏裁被 卅三丁

俳諧新十家類題集夏部

河内俳諧堂未報

浪華阿里園六轡

兩編

四月

笑丸子詠子肥丁四月小士朗

寒比戶不鳥行月里寫紅道度

立夏

山毛櫟叶落人夏月也升六

交子人新足也也之成美

青蘋白重

まと夏と年りやまされ
うれしきをあましや白き月居
更衣格

我さんすきりもやうめが
あらわづからく松竹綱すよ
ゆうりづのうそく文衣
りぬきをそまくやうめ
せうをせむるうもぐ
おくれはくみれつてすけ生
おと根つねねのきぬ 三ノ二

くよふえ又はりのさん文衣士胡
きぬくは被ハサミ文衣文東
男大ゆきをまよひゆく
少くくみ詮うかがひ
初詮世へうちきくとらすあり 井六
灌佛花侍堂 安居

灌仏やさくまきうじふ 井六
是くまみ仏ハシナヒナヒナ士胡
灌仏や醫けくよ高雀 蒼丸
灌仏平雀せ并小寺

花清堂以陳竹里人題之
倉札安而守，虛不以無升，背
升六夜夏夜

短夜夏夜

経有れば月日肥よし
うれとねむ杜母の花の里 乙二
短松はわく小きかなみの森 月居
緑葉はすれまつせ、絶えや道旁
うなぎや橋より、むきよひと、
うなぎをもじりて、眼をもひ、升六
友水をとつぐ毎日はまくら 檜堂

杜鵑

卷二

友は朝か暮かまくらむより成る
能
流川は汝先あやむとてはく
其と生も待つよを 郡 三
事そくゆふわが身の時鳥
うひとまくらむとくや白鷺は杜宇
郭はりゆくの事ふもゆりへづれ
ひくまくら東迎、ゆくかく
時もあきゆくも花はづれあれ
一とすい、雀と家娘 郡 三

子紀江と越すをすがりてうけ
少くもとをまつらむと郭云
音の入る桶金は打立郭云
音の入る大半は打立郭云
郭云初音けりと指年
杜鵑のいふ夏とあひけり
杜鵑のいふ山とあひけり
降の平付の事より郭云
時多咲やまくの根本より
伊勢山や神代山の郭云 桶金

扇を郭云一叶のい
老の葉の初音も杜鵑の杜鵑
何處かの山と杜鵑
鳴れり人故に伊勢
郭云山川の井
鉢付の入やくのい
伊勢の音とすと音節
月の音とすと音節
ちの音とすと音節
芋の音とすと音節

半身の如き紙魚も常とも郭云
松山城下の河川より紙魚を貰ひ
子供の頃より之を愛慕せり
伊豆の近所に有りし處も因春士朗
河源小ゆき道ノモヤシモ松
家が此より時々紙魚を貰ひ
川舟や船で移りて其處にて
魚を賣る者と店舗を有す
墨小山の舟便ハシメル松葉
時々紙魚を賣りと云ふ也

彦馬居はき山杜鵑山山山山
一木ノサ波の山山山杜鵑
郭云サ波の山山山杜鵑
大山と押りひきとおる根因春
喜久村山山山山山山山山山山
はく山山山山山山山山山山山山
郭云鶴や唐め黒玉人
三木ノサ波の山山山杜鵑
杜鵑山山山山山山山山山山山山
むつ山山山山山山山山山山山山

あくつて初夏時節に 杜宇
ひづるるる月の夜 郡云
鳴といひよとすまつゝ 郡云
杜鵑鳥をねめとむとすまつゝ 郡云
郭云も野鳥よつるおひゆく
彦子はおのえのまみとすまつゝ
杜鵑のや桐のあらび
鶯長一也竹下の郭云
杜鵑外や松波せひくと
杜鵑子はうきくも月ねし

巣丸

氣季くも春くも夏くも秋くも冬くも
月中央うちひがひが反 杜宇
村うすすむりのくも林木の
村うすすむりのくも正月お祭
村うすすむりのくも正月お祭
村うすすむりのくも正月お祭
白い寄りくも春くも夏くも秋くも冬くも
郭云地よりうきくも月ねし
子秋年もひづる月ねし
百人一首行かず郭云 宿主
郭云風櫻をうけあひ

かんのと聞く間と呼やかんまう
かんまうを望一すまうは室
あそびゆくわざをせがんまう 二
まつめの道若のまおがんまう
まつめの雲外の遊人薄緋毛 桂崖
松林の空をかのじいかんまう
かんまうをほりあらかじかんまう
多才とてあらかへるあはれ薄緋毛 月翁
かんまうをほりあらかじかんまう 一卷毛

先嘗

かくも身の様子と似て
はまのひやうを寫す
先嘗

身や子孫の老いたる
事の老いたるの様子を寫す
士郎

夕方のものに身の老いたる
事の老いたるの様子を寫す
升六

身の老いたるの様子を寫す
士郎

曉け風よしまたと難き
薔薇の香の如くもやうと難き
多かと云ふ事の如くと難
身の老いたるの様子を寫す
人ぬり身の老いたるの様子を寫す
白いのは田植えの事と難
月若さぬ
曉けの老いたるの様子を寫す
竹と身の老いたるの様子を寫す
身の老いたるの様子を寫す

牡丹

てよみゆせきく家はほぐす
園くの花をとけんづれ
まかた園の牡丹はうねじる
あめの牡丹が咲きまほせ
あら山お家もとむ牡丹や
タクシ大車のよしよ牡丹や
街をよそくおもむ牡丹がまく
りの家屋もとむ牡丹がまく
りの家屋もとむ牡丹がまく

君子花

ねうねう野をひまくとみる
度どや一病とゆれ牡丹
うねね花は花のまくとみる
一行りとけやには牡丹
かたつまく井水をまくとけ牡丹
おねえまくとけ牡丹
照れ顔うまくけり牡丹 月居
山け牛のまくとけり牡丹 高居
西まく西のまくとけ牡丹 一二
むくや唐うなぎく牡丹

伐つるゝ事無ひ
かたつゝ。空木
立美一也。中
家は杜美。道彦
此ノノ人而下ナ
モ也。久之了。

賈生
粟花

帝一の食事の如きは、
白玉う何をもあらば、
すゞ外をよまうつむけやう、
通じて、一里山ふもと、
やあまくまく白い山の、
儀はるまくおおづけ、
もと一岱くゆく通すもと、
白け小油うけあり去地蔵成美
陽花 義

嵩陽花

藝
乙二

うちのまよ、日は本うちのやう也。新居
ひるまく花おらひれど茎うれ、

百合

おもひたる我小らぬつまみ百合葉ハナヒバ 成長
古事記や草は中とてゆうまれ
まちまかのすのすとゆうれ
口花

苔花

一
十

打ヤリタニモ志乃ノシテ苦め元士郎
トモヤモリタニモ志乃ノシテ苦め元士郎
若メ紀モモシロカシヒラリ奇居

酸葵花

かくらはるけむれまほり 乙二
かくらはる雨もと鳴きあ
音集文庫尾次 横室

吳花
數株

名滿朝聞
花落紅顏老
何不
已二
却之
猶有未可全
一教其
升六

卯花

卯花もあて垣の男の士朗
卯花の四月八日すみ裏
うめ花が中をうめてお人成美
うめ花平うめ花幸と夕紅

二

若楓葉櫻

宣称うめ新緑く若楓
りんく葉まめと櫻が元末

三

善葉

倫くと龍其風あじうめ

士朗

二十一

あめまめ葉うめ幸あじうめ
きくくくめ月行くと夕紅と月居
一日乃の山と月とうめ葉うめ
うめくわくとうめうめ成美
小山うめうめうめうめうめ成美
温氣うめうめ小月代うめうめ
うめうめうめうめうめうめ
門口うめうめうめうめうめうめ
成美

夏木立

鶯うめうめうめうめうめ
通彦

清風が横を走る夜半の月居
反歩の月からぬるはるかに升六
人もなく夜未の桂の樹の
解け朝れども夜半の月居
清風が横を走る夜未の月居
下闇
哉

木下闇
茂

下事や鳥のありますから事原道義
下事や小湯の事あります升六
只今の事あります事原道義二

考盤木之陰氣

生者以木比大少以竹比柔柔以
紫紅以朱以黃綠以青之靜也 升六
為自於四面之竹以爲主也 檉圭
袖花 山梔子花 合歡花

何處か振りかへり。花林。升六
伊吹。お花見。山。御。山。升六

櫻花 桃花 南天花
花 紫延年之芝草
櫻花 桃花 檀花

南の花は北の花より花はえしニ

抽花

めの花は紙物とてすく小菴士朗
あはれの白うそとく羽林士郎
ちせんがまよひ入や、筆津奇写

壺橘

そもじの三河の花橘士朗
橘は一かうふ白い筆津奇写

麦枝

かくまく麦刈ね夕日士朗

麦

麦秋やふあうとく砂竹通光

古葉

古葉はよしよしも月昇升六

鮓

ふの鮓小藻さくら初代アキハ
鮓さくらわとうとくくくく

稀人歌意永通柱

月居

初

草は戸や人歌意の初代アキハ
めの縁小つねうらは體引通光

卷之三

故よ起みず拂却さりや殊勦ひしニ
故一ツに喜みそむきゆくゆくへふ
萬はきかせぬる紀里はすくふ
我處りと清くらうむれきと
故はきりとまくちのり翔雲松成美
故も拂はきぬれども經け事過度
小鹿や蟹と
故よ起みず拂却さりや殊勦ひしニ

送火
火事多々
火事多々

イニテラ

蚊送火

うやうや人、住まとうのまく
かやうをばゆすまき柱、り、
大、うねは柱と刈、りやう子、
歌、うく煙、とも、
お、くそ、種とすよ、かやうが、
身、いもとあ、くさり故、

數

うやはあやうといつては不二角 月居
朝毎や花見にちよと庵めや 番丸
うふふうをあはまくやまくそ

故郷とゆくはよやましにまみ
かやふふ時ふ別ハシナリ

世ようるりれすれど故郷が
却れよきむねえさうひもかやま

橋塗

蠅牛 蝙蝠

山風はもくとけくうす
うりや秀衡とお油

薦合く出でてひ故塗

蚕 蚕 羽蟻

虫のぬきゆくとくは山、

三ノ木

五月

松子め紅もくまう葉け法
内もくま本曾め御板林士朗
屋もくま三日月明鏡升六

夕闇平らにけり秋はつ秋
木の葉は花枝はうれめく

松子

あくちあくじくらむけりやく
りれ莢子葉のあむ節々升六

升六

のをうきよとおは津りれ
えまつまつまくいもかく棕れ 士朗

菖蒲叟 菖蒲賣 菖蒲翁

以復ふらひあをねるま 月居

旅のまくわを菖蒲翁

鶴のくわすくわせ

世せせ草せ尾かくしん軒りやち 宮本

引馬せくゆくめめ行やぢ 升亡

足すすくまめくほりやぢ

戸だれけめれんさくらぬ 一二

三三

竹醉日

升くまくわくわくわくわくわくわく
木の木やくわくわくわくわくわく
行行行くわくわくわくわくわく
升升升くわくわくわくわくわく

竹竹竹くわくわくわくわくわく
升升升くわくわくわくわくわく
竹竹竹くわくわくわくわくわく

筆

士朗
成員
聖元

竹けりやかにともまめめりけり 升六
竹や行ひ根くふまきく行く 痴陽
行けりのきとつてのくはせす、
大のまふ行す玉う相まされ、

善竹

善竹やニあすかし庵の前士朗

善竹を波ひじゆきり強氣の

月居

初花おきよもくらむりあく 善居
元花りや先づ傳へり 扬やが 月居

元菖蒲

萍 藻元

うなみやうなみたれ花さり、
萍やさけのりつをみとみ、
萍やあけくまくさず崖あは
より花やねうすくさくとれ

因 植

家事すく朝せるのうに因植、 善居
桂つまきく主さくすうに山因植、
多方せすく小碑は因植、 あひり 桂重
やく里せ教を因植せすとれ 士朗

梅くらあま。田と麻はまうけ
梅くらすす聲ハ人ひ田哥が 宮耳
ヲやくと種くまさり田一枚 道光
苗種くあうほおりすの内 、
しやんくどきつづけ田種が 升六

早夜女 早苗

子少女やねりよとめく梅くら
子少女よいよしむらすの内 月居
寄をうけやくふ早苗はまくわく 寄居
桂くらやくまくわく早苗舟 月居

蘿孟子

山中日出西峰のちよ木 二

藜參

芋けん草藜參の書けうつすり
魚せぬれやくすくおにじき 通彦
大車くわくわくせかくめ約せ郊广 、

紫蘿 茄子 岩臺

紫蘿蘿や朝车れは葉のう側
茄子たまも豆々ハクモホリ 通元
罷蘿れは葉のひまく岩臺 、
升六 成量 升六

夏草 夏野 夏山

夏草や人せひれども蒸れぬ
田原
田原の入れぬよ夏草され
道彦
道彦の草を引ひて夏草山成美
金華

五月雨

さくらや水田とさづり 桜里
牛馬はや夏草引めあらみ
さくらや溪は小橋とさづり 道彦

三ノ木

わくわくと風がうる高く吹き
かのめとまくわくわくと風が震
きく音や有て日ひむかへぬ
田原の風やあくまくと風の音
わくわくと風の音やあくまくと風の音
古池や薄葉ねく人せひれぬ
わくわくと風の音やあくまくと風の音
あくまくと風の音やあくまくと風の音

さういふは隣く西郷極鳥の士助
やうやくは南を北へ飛んでゐる
ひきもが津江の山にあが
ひきもと押水の里宿のそ
きみわやうな煙山の家
ひきわやちの居りは清瀧山
ひきわやお打のれぬるやまの
ひきわやお柳の下の小舟
ひきわや桶井舟をさつて雨成美
ひきわや我葛飾、つむぎ

子之以爲子
子之以爲子

山人へ山里を菊と夏月 一二
山あがれ ようやくあらわす
萩 美おちる いそぎ 支拂う 士郎
立身自らも トモハシム
ソウルアガハ松なるに立てば夜月
さくらのうきよひは月夜の月居
草葉お葉お葉もつるを支拂う

友せむもさと彦るを重つて、巻九
友人や被せうるは月聲、
友人を重ね少しづん友は月、彦東
後きく音めひづく友せ、成美
三句内は小家と友すたれり、
友せう梅ハ古くは枝高し、
友せう毎ね一筆もさりまつて、
そのやう年少うづくに友せ、
音くやすいづくは友せ、升六
彦山や彦中うづく友せ、彦山

螢

散れ行ゆるは、友せう 檜坐
せりすむかひくは、友せう、
降り申よ、彦せう、蔽あふ、
すせむや大升ふと山くわく、士朗
うれくものよ、彦せう、花堂、
まうれう、彦せう、月居
日くわく、有八、彦せう、月居、成美
彦せう、山くわく、彦せう、
彦せう、大升よ、彦せう、

わざりのよさうのいふ事
手は家八百方通よゆる事
小やくへおもひふつてや元行方
かくのまゝいき学事
杉山下をゆる事
背戸川やうよがれをぐる
森山あじ野と学事
うそのう事
太めや量もじゆ左行
事や雀の事
事二

鬼打水花、山中花
山中花、草木有根
岸下、家のうはる
朝、うはる

鴻臚

中江渡口西村深處
鴉比巢也清秋半晴
芦之子也清寒未竟
鵠銅夕雨也鵠銅夕雨

うかくあけ船とて右の眼ま
船西に、ひそかにさりと夜嵐
を守るに船はまよ初夜
鶴が扇傳はるよ火おひる 士朗
筆清く船はるかくも
けむるは鶴、ゆゑみづく
ひよしよひよしよひよしよ
うかく扇傳はるよわくひよ
晚鐘をれやくすよはる
まか風やくゆくゆくまよ

鰯
山風やあらゆくとある。物の通

山川也 あらかへとある。船の舟、
山川也 船はくもいふがまも おはる
船はくもいふがまも おはる おはる
おはる おはる おはる おはる

火串
照射

山のあやめはくわくわく
鰐がさあく、さあまきよ朝むち道夜
早
照射

鹿子

日暮歸原野
霜露沾我衣
胡馬大驚風
夜度燕山稀

ちりくととくと麻せう猶せ等ふ士朗
ひもくと前よもくと麻せ
麻せの折れ下り山家ふ
好井中まづくと麻せぬ
唐子く山風あらわす

六月

六月はやくとくとくとくとく
七月やちくとくとくとくとくとく

嘉祥

一ノ廿四

懷よとくかくとく嘉祥新 宜耳

青嵐 風薰

冬風かすかすかすかすかす
風かすかすかすかすかすかす
經高くかすかすかすかすかす
年ねむかすかすかすかすかす

涼

底ふれて涼 七月は蓮の士朗
すすきの葉絹ひそね花一つ
いはれかの涼 小庭

暖風は吹きまじけに日暮れ
下る秋月の小舟漂ひや棹を寄る月居
多き物は残念むく身を縛る
一葉の内をもくちや門すみ
すくはや唐蘭一りおだてたる
己の門己の庭もすまうれ
すくまや草もくろぬ椎名
さくら木のりゆつめくやすまく
うれ喜びゆきと本末の文涼

我有故郷と野山はすまふ
かのりの草すわまわたるよし又涼或更
すくやといえどすくへんうりよ
人事かなすめ涼と更ひけ
涼とや野山はすくへんうりよ
すくや家が多うへんうりよ
すくや家が多うへんうりよ
まうかく年老ひてすくへんうりよ
まうかく年老ひてすくへんうりよ
すくへんうりよ

暑

玉すりはせむうづくとひよられ
うつだりやかにとえかく屏風絵
まくらのと蟬鳴くねむひづきが
人あひはるも音もせむうづく
蟲けいとむたきくまくまくひづ
音ねうへんくねくねくねくね

白雨

夕立ちや鶯イニキよるは宿所は四士朗
ゆづ立ちや鶯イニキよるは宿所は四士朗

二ノ廿六

白雨や夕立はせ精、かくく
夕立は津しゆくをひく板せ花
ゆづ立ちにやく本厚枝をひく、
白雨ぬ我えうわく葉枝を
夕立お拂ふよちくの鶯イニキ羽
夕立や津しゆくはあくさく
白雨ぬすくわく乃海のあく
夕立やつとすく一疊枝色
白雨や安居せぬけ漏まく夜
夕立やうくく走るまく無月居

雲峯

主は筆、魚子は鴻のちひさと
大和が神ハひいにまくはる
主は筆、魚子は鴻のちひさと
月居
あはれとぞみや不二がねつて筆はる
ひとり家が主はる
我、彦火さくらめおふせをはる
岸はるはくわらめおふせをはる
えりつゝをや十里はそり
改めおほきのまへすはる
成豆

清
水

權其事ありとて之を以て也 升六
事も出来ず、七つ鐘はいづれか
掌に持てぬる事すものか
乞ひはや清水をうやく籠せみ
つゝすう大木へ清き清め
何ひのう清きわらふとぞ
塵が驚かせしむれば清水が
里人めらへくとあざむかく
麻子はまくはよゆとも思ひた

梅井水也水也水也清水也成美
山芋也根也根也根也

晒井虫干

晒井也也也經也吉也亦
松竹洞也虫干也也也奇也亦

帷子

久也小風也也也舟也上也二
帷也也也也也也水也也

久也也也人也也也也芳也

奇也

夏瘦抱籠

亥夜不夜夜也夜也宵也宵也成美
抱籠也入也也也也也也升六

扇團扇

亥夜不夜夜也夜也宵也宵也上乙二
抱籠也入也也也也也也升六

光琳う子鳥羽のり古國扇士朗

舊水水鉢

舊水也也也破鉢也也也也宣木
舊水也也我志高也也也也骨
毛脛や羽高也也也也行手竹扇乙二

青田

書
田
達
喜
日
月
山
月
居

大持手すらよあかに生まはる
とひは花うつすり白くちんじ
有ゆゑむねむねうきは花
おひづは持てうきは花 持て
某とおまきせ莖も御あがり し二

畫顏

至りやあればほんの少しある
至りやあればほんの少しある

中魚せしと日和はくわく 橋堂
夕やや松よ鶴ひく雨せき弓 士朗
ゆきは松下工のひけり 月居
ゆゑは松葉のうらや相扶ひ 升六
ゆゑは松葉のうらや相扶ひ 升六

日暮
春
持
手
之
中
之
草
如
被

綿子や秋詩のうきよのひへ 横笛

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

かくちの花をすまん風情に、

麻
紅花

西林景一庵のとくに名はる花、

川原士朗のとくに名はる花、

綿
花

やせぬ絲絹の花、とくに本種通産

わく、花色赤紫、花期九月、花升六

月、花序下垂、花被筒、花被裂片、

花被裂片、花被筒、花被裂片、花被筒、

花被裂片、花被筒、花被裂片、花被筒、

青
薔

世のすみよしの花、とくに花色、

花被裂片、花被筒、花被裂片、花被筒、

花被裂片、花被筒、花被裂片、花被筒、

花被裂片、花被筒、花被裂片、花被筒、

蟬

嘗とすむ共うるまし風情
月居
清麗や美おやうひるの音を
さうらうもえもあ出立く乳川
せうりやせりへあたて庭は竈
素麁りけもひくわざはす
蟬はゆく涼やかく楓葉景
たりや村のつるぎは葉色
せうれきえび色もさうりじ
胡うね木もだれねよばは葉

鶴は春を経て蟬は冬に

練雲雀 音鶯

行ひ者人材がけと

升六

喜々鳴れ我身もとくの賊民

権主

施承

董竹魚とひくは施承

升六

御放

夕景はひくが今も沙被引

寿湯

りとも秋はそくや沙被舟

、

川風小窓とつまう沙被舟

、

夏威被

友哉之々人也
鳥中々友哉之々家也

俳諧新十家類題集夏部

